知的障害教育における「育成を目指す資質・能力」を踏まえた学習指導と学習評価

－キャリア発達段階の視点を含む指導内容・方法による授業づくりを通して（２年目/２年計画 ）－

〈特別支援教育研究グループ〉
林崎　真衣[1]，千葉　耕太[2]，鈴木　詩子[3]，鈴木　由佳子[4]，黒川　浩也[5]，千葉　拓哉[5]，菅原　淳[5]
利府町立利府第三小学校[1]，栗原市立築館小学校[2]，宮城県立支援学校岩沼高等学園[3]，宮城県立小松島支援学校[4]
宮城県総合教育センター[5]

［要約］　特別支援学校学習指導要領において，資質・能力の育成に向けて三つの柱に基づいて各教科の目標及び内容が整理された。１年目は，授業づくりの考え方，目標と評価規準の設定方法を提案した。２年目は，キャリア発達段階の視点を取り入れ，児童生徒の生活に結び付けて資質・能力を育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法を明らかにした。授業づくりで活用する「場・人・ものマトリックス」と「学習活動（指導内容・方法）設定シート」を作成し，研究協力校及び所属校にて有用性を検証した。
［キーワード］知的障害教育，育成を目指す資質・能力，キャリア発達段階，学習活動，指導内容・方法，生活に結び付ける

１　はじめに

(1) 主題設定の背景

社会の変化に対応し，予測困難な時代を生き抜くために，学習指導要領の改訂において「育成を目指す資質・能力」が三つの柱で示された。また，インクルーシブ教育システムの構築による学びの連続性を重視し，各学部の各段階と小・中学校の各教科等とのつながりの重要性が指摘された。知的障害のある児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以後，知的障害特別支援学校）においても，三つの柱に基づいて各教科の目標及び内容が整理され，内容も充実した。

本県において，知的障害特別支援学校在籍者数は高止まりしており，特別支援学級在籍者数は増加を続けている。加えて，特別支援学級の担任が毎年度替わるケースがあり，小・中学校等や地域に専門的なノウハウが蓄積されにくいことが課題となっている*[1]。また，当センター特別支援教育班の調べによると令和３年度は，本県の特別支援学校 27 校中 12 校が授業づくりを校内研究のテーマとしており，その内７校が学習指導要領改訂に伴うものであった。これらのことから，特別支援学級，特別支援学校ともに，学習指導要領改訂に伴う授業づくりを課題としていると捉えた。そこで，学習指導要領の趣旨を踏まえた知的障害教育における授業づくりの考え方について整理し，学習指導と学習評価の在り方について明らかにすることを目的とし，本主題を設定した。研究期間は２年とした。

(2) 昨年度の研究

２年計画の１年目に当たる令和３年度は，学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりについて理解を深めるために，目標と評価規準の設定方法や「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の考え方について提案した。研究成果物「みやぎ授業づくりガイド」には，知的障害教育の基本的な知識や「教科別の指導」「各教科等を合わせた指導」の授業づくりの考え方，学習指導案の作り方，年間指導計画の例等を示している。一方で，指導内容・方法の設定について具体的な考察まで至らず，２年目の課題として引き継がれた。

(3) 学習活動（指導内容・方法）の設定とは

授業づくりの過程は様々であるが，指導内容・方法の設定においては，年間指導計画と個別の指導計画等を基に児童生徒の実態に合わせて調整・見直しを図っていくことになる。特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部），特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編（上）（高等部），特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編（下）（高等部）（以後，「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小・中・高）」と表記）に示されている各教科の目標及び内容は「各段階の目標を達成するために必要な内容として，児童生徒の生活年齢を基盤とし，知的能力や適応能力及び概念的な能力等を考慮しながら段階毎に配列」されている。授業づくりの具体においては，生活年齢を考慮しながらも，個々の障害の状態や発達段階に応じて各教科の目標及び内容を選択し，場面設定や教材・教具，手立ての工夫をしていく。これらは，全般的に授業者の力量や裁量に委ねられていると言える。

本研究において，指導内容・方法とは，各教科の目標及び内容と場面設定，教材・教具等を組み合わせることで構成されるものと考える。これは児童生徒側から見ると，学習活動と言えると捉えることもできる（以後，「学習活動（指導内容・方法）」と表記）。

(4) キャリア発達段階とは

キャリア教育の手引き*2 (2022)によると，キャリア発達とは「社会との相互関係を保ちつつ自分らしい生き方を展望し，実現していく過程」とされる。その過程の中に，生活年齢に応じた時期ごとの特徴や課題があると考える。その特徴や課題を含むキャリア発達の変化の段階をキャリア発達段階とし，知的障害のある児童生徒においては学部（学校）の各段階に応じていると捉えることにした。時間軸の変遷の中で，児童生徒のキャリア発達段階は変化していく。そのため，授業づくりにおいて児童生徒のキャリア発達段階を考慮した学習活動（指導内容・方法）の設定が重要であると考える。そこで今年度は，知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階を取り入れて生活の変化を捉え，学習活動（指導内容・方法）に反映させていく方法を明らかにするとともに，授業づくりで活用できるツールを開発し提案していくこととした。

２　研究の目的と計画

(1) 研究の目的

知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階の視点を取り入れ，資質・能力を児童生徒の生活に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法を明らかにする。

(2) 研究計画

研究計画は，以下のとおりである（表１）。

表１　研究計画

内　容	時　期
研究構想	４～６ 月
調査研究，文献研究	４～８ 月
学習活動（指導内容・方法）の設定方法の検討	７～11 月
研究成果物作成	７～１ 月
授業実践，検証	10～12 月
校内研修用スライドの作成	12～１ 月
出前研修会での普及	１～２ 月

(3) 研究の仮説

知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階の視点を取り入れ，資質・能力を児童生徒の生活に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法とポイントを明らかにし，それらを示したツールを二つ開発する。二つのツールを活用することによって，「育成を目指す資質・能力」を踏まえた授業づくりが推進されるのではないか。

３　研究の実際

(1) 調査研究

これまでに特別支援教育に携わったことのある小・中学校，高等学校，特別支援学校の教員を対象としてアンケート調査を行った（142 名が回答）。

「各教科等の段階の目標を基にした『指導内容・方法（授業の活動内容)』の設定」の難しさについて，４件法で尋ねた。「難しい」「やや難しい」との回答が８～９割を占めた（図１）。その理由を，選択式で複数回答可として尋ねた。上位二つは，「障害や特性等の実態」と「集団の中での実態差が大きいこと」であった。

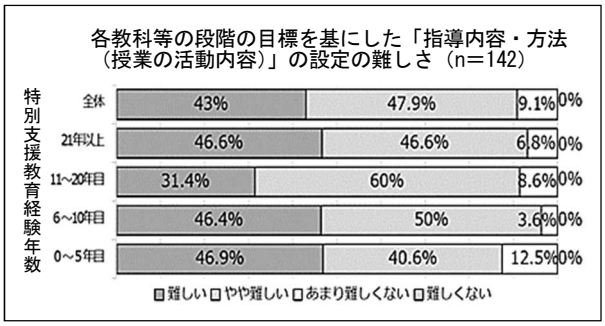


図１　特別支援教育経験年数別によるアンケート結果より

この調査結果より，資質・能力を踏まえ，児童生徒の実態に応じた学習活動（指導内容・方法）を設定することが難しいという課題があることが分かった。本研究における対象は，特別支援教育経験年数に関わらず教員全てとし，資質・能力を育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法や年間指導計画に示されている学習活動について，児童生徒の実態に合わせた調整・見直しのポイントを明示する必要があるとの考えに至った。

(2) 文献研究

①　児童生徒の生活に結び付ける学習活動（指導内容・方法）とは

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小・中・高）において，知的障害のある児童生徒の学習上の特性等が示されている。知的障害のある児童生徒は，「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく，実際の生活場面の中で生かすことが難しい」ため，「実際の生活場面に即しながら，繰り返して学習すること」や「抽象的な内容の指導よりも，実際的な生活場面の中で，具体的に思考や判断，表現できるようにする指導が効果的である」と示されている。加えて，知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本として「児童生徒の知的障害の状態，生活年齢，学習状況や経験等を考慮して教育的ニーズを的確に捉え，育成を目指す資質・能力を明確」にし，「指導内容のより一層の具体化を図る」ことや「生活に結び付いた具体的な活動を学習活動の中心に据え，実際的な状況下で指導する」ことも示されている。

本研究は，資質・能力を児童生徒の生活に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法を提案する研究である。「生活に結び付ける」とは，学習内容を児童生徒の生活に沿うようにする，生かされるようにするということである。それは，

生活に役立つ指導事項を選択することや，知識・技能の習得・活用を目指すことだけではない。学習活動を通し，芸術に触れて情感豊かな心を育てることや，スポーツや音楽等に，生涯にわたって親しむ態度を育成することも大切である。そのため，幅広い体験をすることや感性を働かせること，主体的に取り組むこと，コミュニケーションを楽しむこと，他者と協働すること，自己を表現する喜びを感じること等も重要な学習活動であると考える。様々な学習経験を積み重ねることが，児童生徒の人間的成長の一側面に寄与し，現在及び将来の生活を豊かにしていくことにつながると考える。

② 児童生徒の生活とキャリア発達段階

児童生徒の生活を捉えるに当たり，知的障害の状態や特性，学習状況や経験，本人の興味や関心，家庭環境等，様々な要素があり，個によって大きく異なると考える。しかしながら，どの児童生徒にもおおむね共通する要素として，キャリア発達段階が挙げられるのではないかと考え，知的障害教育におけるキャリア発達段階に関する文献を調査した。

木村・菊地(2011)は，「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』」を 2010 年に作成して提案している。「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案)』」に示されるキャリア発達の段階では，学部（学校）が上がるにつれて，職業及び生活に関わる基礎的な能力の獲得から応用へ，具体的な適用へとステップアップしていく。キャリア発達段階の解説と発達課題においては，学部（学校）の各段階の時期的な特徴等が示されている。その作成について，木村・菊地は生活全般におけるキャリアを指す「ライフキャリア」（Super，1980）の視点を取り入れて「職業生活だけでなく，家庭生活や地域生活を踏まえた内容」としたと述べている。本研究において知的障害のある児童生徒の生活を考える上で，ライフキャリアの視点を取り入れた「キャリア発達の段階」及び「キャリア発達段階の解説と発達課題」は，大いに参考にできると考えた。

③ 児童生徒の生活と「場・人・もの」

知的障害のある児童生徒の生活は，キャリア発達段階に伴って変化するのではないかと考え，特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小・中・高）の各教科の目標及び内容を分析した。学部（学校）すなわちキャリア発達段階が上がるにつれて活動範囲や生活の場が広がり，関わる人が増え，付随して扱うもの（以下，「場・人・もの」と表記）が積み重なり，広がっていくことが分かった。

(3) ツール１「場・人・ものマトリックス」の開発

学習活動（指導内容・方法）の設定における一つ目のポイントは，児童生徒の現時点でのキャリア発達段階と「場・人・もの」の積み重ねや広がりを考慮して，生活を捉えることである。その上で，実際の生活場面を想定した場面設定と適切な教材・教具を活用することが必要であると考える。そこで，知的障害のある児童生徒の生活の変化において，おおむね共通する「場・人・もの」の積み重ねや広がりをキャリア発達段階と組み合わせて示すツールを作成することにした。手順は，以下のとおりである。

①児童生徒の生活年齢等を考慮して，段階ごとに配列されている特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小・中・高）の各教科の目標及び内容から「場・人・もの」に関する具体的な事物を抽出し，キャリア発達段階で振り分けた。関わる機会や頻度の多さを考慮し，学部（学校）ごとに整理した。

②キャリア発達段階に関する記述を基にして，主な生活場面を職業，経済，余暇，地域，家庭の五つのカテゴリーに分類した。

③キャリア発達段階に関する記述と特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小・中・高）の段階の考え方における記述を基にしながら，時期的な特徴等を表す語句を見出しとした。例えば，職業の生活場面では「手伝いや役割，仕事に関わる場・人・もの」「作業や進路に関わる場・人・もの」「調理実習や就労に関わる場・人・もの」という見出しを付けた。見出しの語尾は「場・人・もの」のシートごとに対応させている。これを「場・人・ものマトリックス」と名付けた。下に，「場・人・ものマトリックス」の構造を示している（表２）。

表２ 「場・人・ものマトリックス」の構造

学部	小学部（小学校）	中学部（中学校）	高等部（高等学園）
キャリア発達の段階	職業及び生活に関わる基礎的な能力獲得の時期	職業及び生活に関わる基礎的な能力を土台に，それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
職業	手伝いや役割，仕事に関わる場・人・もの	作業や進路に関わる場・人・もの	職場実習や就労に関わる場・人・もの
経済	買い物に関わる場・人・もの	消費生活に関わる場・人・もの	経済生活に関わる場・人・もの
余暇	遊びに関わる場・人・もの	興味・関心や適性に応じて関わる場・人・もの	余暇を有効に過ごすために関わる場・人・もの
地域	身近な地域で関わる場・人・もの	地域参加や安全に関する場・人・もの	よりよい地域生活，福祉に関わる場・人・もの
家庭	家庭生活を営む上で関わる場・人・もの		

キャリア発達段階と「場・人・もの」の積み重ねや広がりを考慮した「場・人・ものマトリックス」は，知的障害のある児童生徒の生活を捉えるときに視点の一つとして参考にすることができる。示している具体的な事物については，児童生徒の実態，学校や地域の実情に合わせて，取り入れることが難し

い場合や他の学部（学校）に記載されているものを取り入れる場合も大いに考えられる。キャリア発達段階を念頭に置きながら，児童生徒の実態に応じて調整することが大切であり，学習活動（指導内容・方法）の設定において，「場・人」は場面設定へ，「もの」は教材・教具へと転換を図って工夫をすることができる。これにより，資質・能力を児童生徒の生活に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）をより充実させることができると考える。本研究の「場・人・ものマトリックス」を母体として学校や地域の実情に応じて各学校が独自にアレンジを加えることにより，更に活用しやすいものになっていくことが望まれる。

(4) 学習活動（指導内容・方法）の設定方法の考察とツール２「学習活動（指導内容・方法）設定シート」の開発

学習活動（指導内容・方法）の設定における二つ目のポイントは，児童生徒が「学んだことを生かしている姿」を考えるステップを組み込むことである。学習活動（指導内容・方法）の設定方法の基本型について，昨年度の研究を取り込みながら示す。

①年間指導計画に示されている単元（題材）の目標を確認する。

②児童生徒一人一人の「学んだことを生かしている姿」を具体的に考える。児童生徒の生活を捉えるに当たり「場・人・ものマトリックス」を参考にする。

③児童生徒一人一人の「学んだことを生かしている姿」に到達するために，各教科の目標及び内容の調整・見直しを図る。「教科別の指導」の場合は，各教科の段階，目標及び内容を選択する。「各教科等を合わせた指導」の場合は，教科の枠を越えて取り扱う教科とその段階，目標及び内容を選択して組み合わせ，指導内容を決定する。

④上記の③を踏まえ，単元（題材）の目標，個別の目標を三つの柱に沿って設定する。

⑤個別の目標を達成するための学習活動（指導内容・方法）を考える。ここで言う学習活動（指導内容・方法）とは，単元全体を通した主な活動を指す。個別の学習の場合は，「場」と「人」を組み合わせて実現可能な場面設定へ，「もの」は活用可能な教材・教具へと置き換える。集団の学習の場合は，児童生徒一人一人が十分に学べる活動を考えることが大切である。そのため，児童生徒の個別の学習活動（指導内容・方法）をできるだけ全員分取り入れて，単元（題材）計画を立てるようにする。同時に指導体制も考え，集団での学習が難しい場合には，単元（題材）計画に個別指導やグループ指導等を部分的に取り入れることを検討する。「場」と「人」を組み合わせて集団での学習活動として実現可能な場面設定へ，「もの」を集団での学習活動で活用可能な教材・教具へと転換する。

⑥学習活動（指導内容・方法）を通して単元（題材）の目標，個別の目標を達成した児童生徒の具体的な姿を，個別の評価規準，単元（題材）の評価規準として３観点で設定する。ここに「学んだことを生かしている姿」や学習活動（指導内容・方法）の内容が反映されることもある。

このように，「学んだことを生かしている姿」はどの過程においても切り離せず，単元（題材）の目標，個別の目標，指導内容・方法（学習活動），単元（題材）の評価規準，個別の評価規準のいずれとも相互に関わり合い，往還されていくものであると考える。基本型としてそのステップを示したが，設定における順序性を明確にし，限定することは難しい。そこで学習活動（指導内容・方法）を設定する際に，これらの事項の関連や留意点を考慮して意識化するためのツールとして「学習活動（指導内容・方法）設定シート」を開発した（図２）。

学習活動（指導内容・方法）設定シート

【指導の形態】			【単元（題材）名】		【時数】
【指導の期間】			【学部・学年・学級】		
個別に設定	【氏名】	【各教科の目標及び内容】（育成を目指す資質・能力）	【学んだことを生かしている姿】	【場・人・もの】	【学習活動】（指導内容・方法）

集団で設定	【主な学習活動】（指導内容・方法）	【指導体制】	【時数】

図２　「学習活動（指導内容・方法）設定シート」

「学習活動（指導内容・方法）設定シート」は，「教科別の指導」「各教科等を合わせた指導」のいずれでも活用することができる。また，単元（題材）や小単元（小題材）等内容や時間のまとまりごと，個別，グループ，集団など指導体制ごとなど，授業者のニーズに合わせて柔軟に活用することができるようにした。

(5) 昨年度の研究との関連

本研究では，これらを活用した学習活動（指導内容・方法）の設定方法を研究成果物として「みやぎ授業づくりガイド＋（プラス）」にまとめた。加えて，校内研修で活用することができるスライドをプレゼンテーションソフトで作成した。

「みやぎ授業づくりガイド」では，一連の授業づくりの流れや目標と評価規準の設定方法を示している。一方，「みやぎ授業づくりガイド＋」では，指導内容・方法を目標や評価規準との関連性を踏まえて，学習活動の設定方法を示している。「みやぎ授業づくりガイド」と「みやぎ授業づくりガイド＋」を合わせて活用することで，知的障害のある児童生徒の資質・能力を育成する授業づくりに取り組むことができる。これにより，本研究主題に迫ることができると考える。

(6) みやぎ授業づくりガイド＋」の検証

検証は，２段階で行った。１段階目における検証の日時と対象は，以下のとおりである（表３）。

表３　１段階目における検証の日時と対象

日　時	対　象
10 月 11 日 11 月 14 日	宮城県立小松島支援学校　中学部教員 高等部教員
11 月 28 日	宮城県立角田支援学校　　中学部教員

検証の目的は，「みやぎ授業づくりガイド＋」と「場・人・ものマトリックス」及び「学習活動（指導内容・方法）設定シート」の二つのツールの改善・改良点を探ることである。方法として，「みやぎ授業づくりガイド＋」に基づき，二つのツールを活用した学習活動（指導内容・方法）の設定を行った。架空の年間指導計画を提示し，自身が担当する児童生徒を想定して調整・見直しを図り，学習活動（指導内容・方法）を設定した。終了後に，感想の聞き取り及び記述式のアンケート調査を行ったところ，以下のような意見が挙げられた（図３）。

- これまで自分の授業が児童生徒の生活に結び付いた学習活動となっているか疑問に感じることがあったので，「みやぎ授業づくりガイド＋」で示された理論が興味深い。
- 「学習活動（指導内容・方法）設定シート」を記入することで，普段何気なくやっていることを改めて考える機会になった。
- 「場・人・ものマトリックス」が児童生徒の生活の変化を捉える際に参考となった。

図３　聞き取り及び記述式のアンケートの意見より

これらの意見より，「みやぎ授業づくりガイド＋」と二つのツールは，授業者が児童生徒の具体的な生活場面を想起しながら場面設定や教材・教具を工夫して，学習活動（指導内容・方法）を設定する際の一助となり得ることが分かった。一方，「みやぎ授業づくりガイド＋」に掲載したツールの活用方法が伝わりにくいとの指摘を受け，分析の上，大幅な修正を加えた。内容や表現の見直し，精選，構成の変更，文字の大きさや文章量の調整，図やイラストの挿入等を行った。学習活動（指導内容・方法）が設定しやすいようにステップを示した。また，「学習活動（指導内容・方法）設定シート」の記入例や授業例を掲載した。改善・改良後の２段階目における検証の日時と対象は，以下のとおりである（表４）。

表４　２段階目における検証の日時と対象

日　時	対　象
12 月 7 日 12 日	宮城県立小松島支援学校　小学部教員 高等部教員
12 月 8 日	栗原市立築館小学校　特別支援学級教員
12 月 8 日 9 日	宮城県立支援学校岩沼高等学園　教員
12 月 16 日 19 日	利府町立利府第三小学校　特別支援学級教員

検証の目的は，①学習活動（指導内容・方法）の設定方法が「みやぎ授業づくりガイド＋」に明示され，教員から理解され得るものかどうか，②二つのツールを用いて，資質・能力を育成する学習活動（指導内容・方法）を設定することができたかどうかの２点である。方法は，１段階目における検証と同様である。以下のような肯定的な回答を得た（図４）。

- 「みやぎ授業づくりガイド＋」に示されているステップに沿うことで，学習活動（指導内容・方法）の設定の流れやツールの活用方法が把握しやすい。
- 設定におけるポイントを違和感なく受け入れられた。
- 「学習活動（指導内容・方法）設定シート」によって，関連事項を行き来して設定することができた。書き出すことで頭の中を整理し新しいアイデアが生み出された。
- 「場・人・ものマトリックス」については，具体的な事物の掲載によりイメージが湧き，小・中・高と将来を見通した指導につなげることができると感じる。

図４　聞き取り及び記述式のアンケートの意見より

これらの意見より，特別支援学級や高等部（高等学園）においても，児童生徒のキャリア発達段階を取り入れて生活の変化を捉え，学習活動に反映させていく方法が妥当であること，授業づくりで活用するツールとして「場・人・ものマトリックス」と「学習活動（指導内容・方法）設定シート」には有用性があることが分かった。

４　おわりに

学習指導要領の趣旨を踏まえた知的障害教育における学習指導と学習評価の在り方を明らかにし，授業づくりの充実に２年間の研究で迫った。課題として，目標と評価規準の設定方法，学習活動（指導内容・方法）は多岐にわたり，提案内容が一考察に過ぎないという側面がある。また，今後，検証対象の母数を増やして特別支援教育経験年数別や校種別に分析を図ること，授業実践とその後の児童生徒の変容を見取ること等，様々な視点から本研究の有用性を更に検証していくことが必要であると考える。今後の展望として，出前研修会等で２年間の研究成果物を紹介し，普及と活用を図っていきたい。

【注釈】

*1　宮城県教育委員会：宮城県特別支援教育将来構想実施計画（後期）（令和２年～令和６年度）令和２年３月

*2　文部科学省：小学校キャリア教育の手引き（令和４年３月）中学校キャリア教育の手引き（平成 23 年６月）高等学校キャリア教育の手引き（平成 23 年 11 月）

【引用・参考文献】

1)　木村宣孝・菊地一文：特別支援教育におけるキャリア教育の意義と知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」作成の経緯　国立特別支援教育総合研究所研究紀要第 38 巻，2011

知的障害教育における「育成を目指す資質・能力」を踏まえた学習指導と学習評価
―キャリア発達段階の視点を含む指導内容・方法による授業づくりを通して（２年目／２年計画）―

背景

学習指導要領の改訂
インクルーシブ教育システムの構築による学びの連続性を重視して，小・中学校の各教科等とのつながりが留意された。知的障害教育においても，三つの柱に基づいて各教科の目標及び内容が整理された。

宮城県の知的障害教育に携わる教員の課題
・専門的なノウハウの蓄積
・学習指導要領改訂に伴う授業づくり

研究目的

２年計画の目的
学習指導要領の趣旨を踏まえた知的障害教育における授業づくりの考え方について整理し，学習指導と学習評価の在り方について明らかにする。

今年度の目的（２年目）
知的障害のある児童生徒の**キャリア発達段階**の視点を取り入れ，**資質・能力**を児童生徒の**生活**に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）の設定方法を明らかにする。

「**生活**に結び付ける」とは？
→学習内容を児童生徒の生活に沿うようにする，生かされるようにする

キャリア発達段階とは？
→特徴や課題を含むキャリア発達の変化の段階

昨年度の研究との関連

令和3年度 研究成果物
「みやぎ授業づくりガイド」

成果・目標と評価規準の設定方法を提案。
・「主体的・対話的で深い学び」の観点からの授業改善を提案。
課題・指導内容・方法の考察が不足。

<授業の構成図>
学習指導要領
年間指導計画
児童生徒の実態
単元の目標　個別の目標
指導内容・方法の設定（扱う教科の目標及び内容）
単元の評価規準　個別の評価規準
授業実践
評価
授業の評価・改善

研究内容

調査研究（特別支援教育経験者を対象とした，実態把握のためのアンケート）
資質・能力を踏まえ，児童生徒の実態に応じた学習活動（指導内容・方法）を設定すること。
→８～９割が「難しい」「やや難しい」と回答

文献調査①木村・菊地(2011)国立特別支援教育総合研究所「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』」
→学部（学校）の各段階に応じて変化する時期的な特徴や発達課題

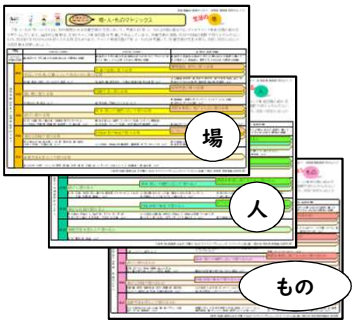
文献調査②特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編
→学部（学校）が上がるにつれて変化する「場・人・もの」の積み重ねや広がり

令和4年度 研究成果物
「みやぎ授業づくりガイド+（プラス）」

ツール１

「場・人・ものマトリックス」

知的障害のある児童生徒の**生活の変化**において，おおむね全員に共通する**キャリア発達段階**と**「場・人・もの」の積み重ねや広がり**を組み合わせて示した。児童生徒の生活の変化を捉えることができる。学習活動の設定において，場面設定や教材・教具の工夫へと転換を図ることができる。



参考に記入

ツール２

「学習活動（指導内容・方法）設定シート」

学習活動（指導内容・方法）の設定における様々な事項の関連や留意点を考慮し，意識化するためのツールとして，シートを作成した。**学習活動の設定における2つのポイント**を押さえるとともに，各教科の目標及び内容を明確にすることができる。

ポイント①
児童生徒の生活を捉えること
ポイント②
「学んだことを生かしている姿」を考えること

学習活動（指導内容・方法）設定シート
【指導の形態】　【単元（題材）名】　【時数】
【指導の期間】　【学部・学年・学級】
個別に設定：【氏名】　【各教科の目標及び内容（育成を目指す資質・能力）】　【学んだことを生かしている姿】　【場・人・もの】　【学習活動（指導内容・方法）】
集団で設定：【主な学習活動】（指導内容・方法）　【指導体制】　【時数】

第１章　理論・ツール編
・「育成を目指す資質・能力」を児童生徒の生活に結び付ける学習活動の考え方を提案。
・活用できるツールを提案。

第２章　設定編
・学習活動の設定方法をステップごとに説明。
・児童生徒の実態に応じた調整・見直しの留意点を明記。

第３章　活用例編
・ツールの活用例を掲載。
例　特別支援学校中学部
　　高等学園

研究計画

月	内容
4	研究構想
5	調査研究・文献研究
6	
7	学習活動（指導内容・方法）の設定方法の検討
8	
9	研究成果物作成
10	授業実践・検証
11	
12	校内研修用スライドの作成
1	出前研修会での普及
2	研究発表会
3	Webページ公開 次年度の研究計画

検証
研究協力校にて改善・改良の情報収集。所属校にて，学習活動（指導内容・方法）の設定方法の妥当性とツールの有用性を検証。

今後の展望

令和４年度研究成果物
「みやぎ授業づくりガイド＋」

令和３年度研究成果物
「みやぎ授業づくりガイド」

二つのガイドを活用することで，知的障害のある児童生徒の資質・能力を育成する授業づくりに取り組むことができる。

目指す姿
目指す教師の姿
資質・能力を児童生徒の生活に結び付けて育成する学習活動（指導内容・方法）を設定し，授業づくりに取り組むことができる教師。